

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013 大賞

杉山夏実

◆大学院美術研究科デザイン専攻博士課程2年

高校生の頃から、新宿や渋谷といった街の違いを感じながら散歩するのが好きでした。さらに遡ると、保育園のとき、動物の巣の絵を描くことがよくありました。ここが寝床で、ここが食料備蓄庫みたいに、動物があなぐらの中でどういうふうに住んでいるかを想像するのが楽しかったのです。それがたぶん環境や生活に興味をもったきっかけかもしれません。

藝大の大学院に入る前は、多摩美術大学の環境デザイン学科で建築を専攻していました。大学の卒業制作では、仮設住宅（木造仮設住居群）の提案をしました。大きな公共施設を設計するといったテーマ設定に、あまりリアリティを感じることができず、人間が生活する時間をデザインしたいと思ったのです。デザインとは、かたちなど通して人間の心にアクセスすることであり、モノが消えても人間に作用したことの

ほうが大事なのではないか。仮設住宅は消えてしまうけど時間が残る、その時間をデザインしたかったのです。

多摩美大を卒業後、デザイン事務所に勤めていたのですが、東京藝大大学院のデザイン専攻に進みたいと考えました。藝大のデザイン専攻は、「プロダクトが作りたいの?」「建築が作りたいの?」といったふうに、つくる媒体を規定されることがない。院試で話を聞きにきたときも、問題意識を否定しない場であることを実感できました。

「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013」で大賞をいただいた「About my "topos"」は大学院の修了制作でした。自分が育った東京郊外の日野市という丘陵地帯の住宅地をリサーチし、環境としての街のカラーの違いや、人間の内面に光をあてたかったのです。いっ

ぽうで、公共事業や商品の大量生産に対して、仮想の大衆を設定していることに違和感を覚えていました。「消費者ってだれ?」「市民ってだれ?」「社会」というけど、社会に実体があるのか?といった問いかけです。

現在の博士課程でも、修了制作のテーマは持続しています。その延長線上にありつつも、どのように発展させていくのかが大きな課題です。いま私がいる東京から地方、世界へと対象地を広げていくとき、結局は自分のフィルターを介さざるを得ないのではないか。博士研究として客観性を第一にすると、第三者が再現できるような「型」をつくることになりませんが、わかりやすく伝えるために色鉛筆や粘土を手になにかをつくりはじめるとそれはわたしの「かたち」になります。しかし、たんなる自己表現と捉えられてしまっただけではいけません。そんな思考錯誤をしているところです。



「About my "topos"」展示風景

すぎやま・なつみ

1985年東京都生まれ。多摩美術大学美術学部環境デザイン科卒業後、デザイン事務所勤務を経て、東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻に入学。2013年に「About my "topos"」で MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013 大賞を受賞。

第82回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽)第1位

網守将平

◆大学院音楽研究科修士課程作曲専攻3年

僕が音楽の創作において最も興味を持っているのは、諸々のテクノロジーを用いて、人間や動物が音や音楽を聴くという体験そのものを変容させ、聴き手の意識を拡張させていくことです。そのためには建築家や映像作家、その他の美術家が持っている技術や感性がどうしても必要だし、彼らの活動に僕自身も常に影響されているので、自分が作曲する音楽は、少なからずそういった側面が反映した作風になっています。

藝大では学部の1年のとき、デザイン科の助手の方の映像に曲をつけたり、2年のときには大学院映像研究科の学生の依頼で長編映画の音楽を担当させて頂いたり、他学科との結びつきを深めることができました。

自分にとって、音楽体験と映像体験との関わりはもともとすごく大きなものでした。たとえば現代音楽を最初に意識した原体験は、スタンリー・キューブリック監

督の『2001年宇宙の旅』で、この映画で作曲家リゲティの存在を知り、感銘を受けたのを覚えています。その後は映像からだけでなく、多くの芸術から音に関わる影響を受けてきました。

コンピューターを用いた電子音楽/サウンドアートの分野でも活動しています。現代音楽の技術や作風は、こういった活動との関わり合いの中で磨いてきました。異なるジャンルの音楽を作る行為が僕の中では拮抗しており、それが作品の面白さや評価に繋がっているともしえるかもしれませんが、その代償としての葛藤は常に付き纏います。学部の2年生頃からこれらのテリトリーを行き来していますが、いくら活動領域を広げても作品が広く伝わりやすくなるわけではないという実状は今でも変わらないからです。なので、今後はもちろんあらゆる音楽を教養として学び続けながら、他人の評価に囚われず率直に自分の音楽性を発散できる活動にシフトして

いくつもりです。

日本音楽コンクールには、複雑なバックグラウンドを伴って発展した自分の現代音楽が、今日の現代音楽リスナーにどのように伝わるのか、上記のような葛藤にある種ヶジメをつけるような気持ちで出品しました。聴き手の意識を拡張させるというコンセプトをこれまで以上に重視した影響で、楽曲の構築度のリスクや演奏技術のリスクが大きくなった作品だったので、1位を頂けるとは全く予想しておらず、驚きました。嬉しさがある一方でもう少し批評的なフィードバックを頂けたらよかったなとも思っています。僕の場合、厳格に批評されることが次の作品への大きな原動力になるからです。いずれにせよ、多くの方に作品を聴いてもらえたことは大きなターニングポイントになったと思っています。これからも結果に流されず、自らの方向性をコントロールしていきたいと思っています。



サウンドアーティストの大和田俊とのラップトップデュオ「Cryogenic Rhythm Science」のライブパフォーマンス。当ユニットでは網守自らライブ中の映像も担当している。(撮影：三木俊達)



第82回日本音楽コンクール(2013年)作曲部門の演奏後
写真提供：毎日新聞



あみもり・しょうへい

1990年東京都生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部作曲科を首席で卒業。現在同大学大学院音楽研究科修士課程在籍。2007年度第31回ピティナ・ピアノコンペティション特級において、新曲課題曲作品賞受賞。2011年東京藝術大学内において長谷川良夫賞受賞。2012年東京国際室内楽作曲コンクール入選。2013年第82回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽)第1位受賞、併せて明治安田賞受賞。坂本龍一氏がナビゲーターを務めるj-wave[Radio Sakamoto]オーディションにおいて、電子音楽作品が入選。2014年電子音楽レベルPROGRESSIVE FORmよりリリースのコンピレーションアルバム「Forma. 4.14」に、AOKItakamasa等多数の電子音楽家と共に参加。www.shoheimimori.com



『神奈川芸術大学映像学科研究室』 © 東京藝術大学大学院映像研究科

さかした・ゆういちろう

1986年広島県生まれ。大阪芸術大学卒業後、東京藝術大学大学院映像研究科に入学。2011年に監督した『ピートルズ』でゆうばり国際ファンタスティック映画祭2012北海道知事賞を受賞。2013年、東京藝術大学大学院映像研究科7期終了制作として監督した『神奈川芸術大学映像学科研究室』がSKIPシティ国際Dシネマ映画祭2013長編部門(国際コンペティション)にノミネートされ、「審査員特別賞」を受賞。さらに、「SKIPシティ Dシネマプロジェクト」の第4弾作品に選出され、公開が実現した。

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭審査員特別賞

坂下雄一郎

◆大学院映像研究科映画専攻修了

今回受賞した『神奈川芸術大学映像学科研究室』は、大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業後、大学で助手をしていたときの経験をもとに撮りました。自分と同じような助手が主人公で、ある日、学生が機材を盗むという事件が起き、学科をあげてもみ消そうとする、といった粗筋です。東京藝大大学院の修了制作ですが、もともと映画祭に出品したい、できれば最終的に上映したい、と思って構想を練りました。

映画祭の傾向と対策を考えたとき、まず国内では、他の作品とジャンルが重なるものでは賞をとりにくいだろうと思いました。僕と同世代の監督が撮る映画には、登場人物が少なく、その人間関係や細かな心理描写を題材とする作品が多いのです。もともとそういうものをつくるのが苦手だということもあって、できるだけほかの作品と重ならない題材やジャンルを考えたときに、物

語を展開させていく動機が、事件や事故というものが少ないと気づいたのです。そのうえで、それほど知られていない業界の内幕もの、そして自分が経験した仕事ではどうだろうか。映画製作を教えている大学が舞台で、先生や学生ではなく、助手という微妙な立ち位置で働いている人間を主人公にしたら、僕が撮る必然性もあるだろうと考えました。

今回審査員特別賞をいただいた「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」は、埼玉県主導のもと、川口市を拠点として映像に対する活動を支援するSKIPシティ主催の映画祭です。長編部門には日本映画だけではなく、海外の作品を対象にしたコンペもあります。そこで『神奈川芸術大学映像学科研究室』が、日本映画を対象にした審査員特別賞を受賞するとともに、劇場公開を支援する「SKIPシティ Dシネマプロジェクト」

に選出されたのです。スカラシップのような形ではなく、作品を公開してくれるというのは、作家にとっては、とてもありがたいプロジェクトといえるでしょう。

藝大の大学院映像研究科は、設備や機材、作品に対しての予算があり、すごく恵まれていると思います。学校の施設をほぼ24時間使えるうえに、スタッフも学生ですから、人件費もあまりかからない。実際に今回の規模の作品を学外で撮ったとすれば、予算的にはとんでもないことになったでしょうね。

今後も劇場公開の長編映画監督としてやっていきたい。現実にはなかなか難しいですが、監督の名前で見るような映画ではなく、題材やストーリーがおもしろそうだという理由で注目される作品をつくっていくことが理想です。